惰性

てぃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
惰性

【Ｎコード】
Ｎ７４６４Ａ

【作者名】
てぃ

【あらすじ】
元、重度アトピー患者だった千絵。２３歳になり、アトピー、絶対無縁と感じていた『きれいどころ』と感じる職を選び、日々を満喫していくが…。

1.

「だって、あいつ被爆してるからな（笑）」
言い終わるが早いか、この手が早いか、思わず上司である元川の胸倉つかんでた…
「しばく！」
なんて幼稚な発言…
「次、そんな発言したらどついたる！」
…ぁあ情けない…
「私は絶対許さんからっ」
…やめてくれ…これが私の発言か…
冗談でもしばくだどつくやなんて…。
本来そんな発言大嫌いな私が、しかも上司に、えらい暴言はいたもんや。

場所は深夜の居酒屋。飲んではっちゃけた仕事仲間達。
テンション上がってる中での、私の発言はサスガにやばい…暴言はいた後、
どう切り替えしたかは忘れたが、とっさにおちゃらけて場の雰囲気を取り繕った。

あー・・・またこの夢か…。もう1年以上もたつのにしっかり覚えてら…。根暗だな私も。
1年も前、上司にはいたその暴言を私はまだ覚えてる。
当時、飲みの席ではしゃぎまくりの中、新入社員のある男の子の話になり、
上司がアトピーであるその男の子に対して使った比喩である…。で、私がキレた…と。
大人気ない…。

社会人として、これくらいの事は慣れてしまうべきことなのか、慣れなくていい事なのかいまだにわからない。

「おはよーございます！」
出勤早々、１年前例の発言をしたかつての男性上司、元川に会った。
『ぁあ！おはようございます！』
私たちは気まずくなることもなく、例の１件はなかった様に、今も仲良く仕事仲間だ。

今では私も昇進し、
役職上では追い越してしまい、私が彼の上司に…。
なんで、先輩を差し置き私が昇進したのやら…私は惰性をもっとうにしてるのに…。
なんで、私はこんないわゆる一般的にきれいどころと思われる職場で働けているのか…
…アトピーなのに…。

2

ちっちゃい頃からずっと私はアトピー。
なんで、私がこんな目にっ！と何度も感じてきた。
一時期は、顔にひどく症状がでて、電車に乗っても歩いていても、人の目が痛かった。
小さい頃からアトピーとはいえ、顔に出たのは十代後半になったころ。
…で、向けられるのは、慣れていない好奇の視線…

それは勘違いなんかじゃなくて、
心配の眼差しでもなくて、
好奇にあふれる視線。

私は一日中、こう自分に言い聞かせてた。

こんなことなんかで泣かへん！私は辛くない辛くない辛くない！
見るな見るな見るな見るなっ！

電車に乗ると明らかに聞こえてくる声。
「ねね…あの子、ケロイド？」
「ちょちょ…前方、黒の帽子の奴！」
なんで、連れに知らせてまで私を見る必要が！？普通に聞こえてんやけど？
…ジロジロみるくせに、こっちがそっちをみたら、あからさまなその目のそらせよう…
私は電車にも乗ったあかんわけ！？

病院に行けば行ったで、

「あらぁ～もう、おいわさん状態やねぇ」
…それが医者の言うセリフか？
「また酷くなってっ！ちゃんと薬塗ってんのか！？」
なんで、私が一番つらいのに、親は叱るんやろうか？
私の管理不足ちゃうしっ！
人一倍肌大事にしてるし、気にしてるってば？
アトピーが悪化したのは、私のせいちゃうよ？
なんでひどくなればひどくなるほど、私が責められる？なんでこんなに人に見られてしまう？

もう説明する気力もないわ…
もう誰にも見られたくない…誰にも会いたくない…

２０年近く生きてきてこんな事感じたことなかった。
けど私はこのままくじけてなんかやらんしっ！

そうやって強がって、痛みを無視して頑張ってた。
このあえてはりつめたきた糸を切ったのは、ある子供の叫び声…

「ゾンビっ！！」私を指差し、ある日、目の前の見知らぬ子供がいきなり泣き叫んだ…
なんて！？私はただ電車に乗ってるだけなんやけど…？
ビビり、ショック中の私にその子の母親らしい人は慌てながら私に謝った。
「すみませんっ…子供なんでっ正直にものを言ってまうっていうか…」

…いえ…ごめんなさい…怖がらせて……すみません…
はぁ…苦しいんやけど……それ以上、大した反応もできず無表情で電車をおり、トイレへ。

個室に入った瞬間、吐いて、泣いた…

痛い痛い痛いってば！涙しみすぎっ！痛すぎっ！慌ててティッシュで涙が流れないように押さえながら声を殺して泣いた。
私には涙を流す事さえ許されへんの！？

それから、また症状は悪化し、トイレに行くにも這っていくようになっていた。
悪化してのことか、ストレスなのか、熱はずっと出てる。おなかが痛い。すぐ吐くし、おなかもくだしっぱなし…。
動くだけでも力がいるし、表情を変えたり口を動かすのも痛かった。
半寝たきりというか、ひきこもりというか…。
その数日間、このまま私は廃人になるのかとおびえていた。

短大に通うためと一人暮らしをしてるけど、
この状態で、その短大にもいかれへん。
バイトだっていかれへん。友達からの遊びの誘いだって断りっぱなし。
電話に出るのも疲れる…。
友達の声。今までは、聞くと癒されていた元気な友達の声を聞くのがしんどい。

こんな顔で表なんて、絶対出たないし、大体、表情どころか口を動かすことさえしんどい。
こんな姿は誰にも見られたくない。外に出たくない。
でも…本当は、外に出て堂々と歩きたいんよな…。
晴れた空の下…いや、雨でもいい。
普通にいつもの道を歩きたい。普通に顔を隠さず歩きたい。
皆と会いたい。

なんで私は一人ぼっち??
いや、自分で周りをシャットダウンしてるんやけど、
自分から一人ぼっちになってんやけど、
こんなはずちゃうって、こんなの私ちゃうって、現実逃避ばっかりやわ…。

1ヶ月前は、友達皆ではしゃいでた。
1ヶ月前は、短大帰りにナンパされて、うっとうしがってた。
1ヶ月前は、大口開けて笑ってた。
1か月前は、普通に学校行って、バイトして、人と話して、
知らない人と普通にすれ違ってた。

なんで、私がこんな目に…。

この私にとっての地獄はいつまで続くの?

3

はぁー。天気がいい！気候もいい！
しかも今から昼食！
これって幸せすぎ！

仕事のお昼休みで仕事仲間と昼食へ…。

短大のあの激変し悪化したあの約2ヶ月間から、
もうすでに3年。

私は、大口開けて笑うことができるし、涙も拭かず大泣きできる。
友達やら仕事仲間と一緒に笑いあえる。
電車に普通に乗って、普通に表を歩く。
でもって、知らない人とは普通にすれ違ってる。
他人が私を見て「アトピー」の文字を思い浮かべる事もないと思う。

人を【お岩さん】呼ばわりする医者から一転、
別のよい病院と先生に出会ったりして症状はびっくりするほど良く
なった。
で、今ではこうして堂々と外を歩けている。

どんでん返しはあるものだ。

「チエって頑固よなぁ。」
ぇ？一緒にご飯を食べてる香夏子が言った。
チエとは私の事。
『なに??急に?』
「いや、さっき会議の件。チエの、上司にもおれないその態度…

ぶっちゃけ、だれかガツンといってくれーって思ってたんよな。
けどうちにはできへんし、頼もしくはあるけどな。」
…
『…はぁ。だから私は扱いにくいって思われるんやって…』
「出た！チエのひねくれトーク…」
『ひねくれって…ていうか、香夏子は逆に柔軟すぎ…。』
「言うな言うな！逆に、私はこうもりって思われてんやって！」
『こうもりって…笑』
―私には、香夏子のその柔軟さが羨ましい。
上司にも、仲間内にも好かれやすいその柔軟さ…―
まっわたしには無理なんやろうけど。

そのまま、半分意味のない話をしながら会社に戻ると、
他部署の松原先輩が事務所でないてる…。
「もういいです！！」
って走り去る先輩…。えー？
何があったんか、知らんが仕事中やろ？
だから女は…て言われるんじゃね？
やだやだ…。
松原先輩に、もういいです！って言われたその上司と目が合う。

「おお、佐崎、お疲れ」
『お疲れ様です。』
「ちょっとなぁ、松原が…。見てた？」
『あ～、はい。』
「そうか。佐崎、ちょっと頼むわ。見てきて。毎回悪いな。部署もちゃうのに。」
苦笑いで、頼んでくる上司を見て、ため息が出そう…。
『はい（はい）』
心の中では2度返事をしながら、私も苦笑いを返した。

…ここは学校か？
ほら、またあの上司たちの中で、これだから女は。といわれるのだ。
…いちいち、そう嫌味っぽく感じる私もまた、【女】って感じやな。

『たぶんここ』
独り言をつぶやいて、女子ロッカーに入ると、・・・いました。松原先輩。
「あー、佐崎っちぃ…もう最低～」
『はいはいはい。はい！ティッシュどうぞ！』
「もう、遅刻したらさ、最近多ないか！？っていわれてさぁぁぁ」
『ぁあ、そうなんですか？』
「…」
『……え！？』
「ん？」
『え、いや、それだけですか？？』
「そう！そんなに多くないしっむかつくっ」
…まて、相手は先輩。そんでもって厳しいことをいうのが私の役目なわけじゃない。
…松原先輩たちのこういう次元の低い、もめ事は今に始まったことじゃない。
ほら、なんか気の利いたことを言うのだ佐崎ぃ、頑張れ私。
『まぁ、けど、仕事ではあんま泣くなよ先輩～。はいティッシュ！
泣けば泣くほど、マイナスのレッテル張られますよ～？
2回、3回泣いたら、それはもう『よく泣く』になるんですよ？
遅刻も泣くのんもルール違反。
松原先輩はできる人やのに、こんなんで、評価さげてたらもったいなくないですか？』

松原先輩が仕事出来るか出来ないかなんて、本当はぶっちゃけ知ら

ない。同じ会社とはいえ、一緒に仕事あんましたことないし。
けど、遅刻を指摘されて逆ギレしてるなんて、仕事以前の話かも。
しかもこの先輩の遅刻の言い訳はいつも無理がある。ロッカーで舌をだし
「ホントは寝坊」
ってよくいってるし。
ホント、上司は先生じゃないんだから…。まぁ私も人の事は言えんやろけどさ。

「もういいっ辞めたい！てかもう辞めるしっ」
『はぁ～上司に辞めるとかあんまり言わない方がいいですよ？まっ私の前だけで済ますならいくらでも聞きますけどね。』
あ～結局私も、ちゃんと取り合ってなんかばからしいかも。

というより、私も早く職場に戻らないと。
『とにかく、松原先輩？泣きやんで、明るくちゃんと戻って来てくれる人って信じてますからねっ遅刻の件も、なんなら私も一緒にいくんで、上司に謝りにいきましょ！なんならまた声かけてくださいねっ』
半分一方的に話しかけて、戻ることにした。
多分、今日の仕事の締めくくりは、他部署の上司のところへ、その他部署の先輩を連れていく。…で、また逆ギレする先輩を、関係ない私がフォローをいれるってとこやろうな。毎度やし。
『まったく、今日も平和や』って廊下を歩きながら半笑いになった。
私は職場でとっても偉そうな態度だ。

4

あっついっ！
まだまだ夏は本番も迎えてない…やのにこの暑さ。暑いというより熱いっ！
汗に弱いアトピー女にとって、この熱さ（暑さ）は犯罪ちゃう？
まったく！休みだっていうのに、暑さで起きてもた。
クーラーかける？否、朝からもったいないし。かといって今日は特に外出する用事もないんよな～…。
とりあえず体にかかってるタオルケットをけりとばし、寝返りをうった。う～…これが、もうじき２３才になろうかっていう女の夜明けか！？情けない…
こんな休みはあかんわな…とは思いつつ、結局ふて寝…結局だらだら寝てしまう。

…？寝返りを打つときに視界の端に、携帯電話が点滅してるのが見えた。
『あ、メール…』
独り言を言いながら、受信していたメールを開いた。
『さゆ！？』

―久しぶりりーん！チエ！？元気？さゆみでーす。
じつは今そっち方面にむかってます。朱石病院に行くために。また入院やねんよ～。
現在夜行バス！今回の検診は急やったから、チエ達への連絡もこんな急なんやけど…。
できたら、また会いたいわー…ちゅーか会いに来てなぁ。哲とかマサにもメールしときまっ！―

『っ！？まじかよ！？』

仲間の急すぎる連絡メールに、思わず飛び起きた。

さゆみ（さゆ）とは、３年前アトピーで入院してたときにできた仲間・・・。

メールの最後にあった、哲、マサも同じく入院したときにできた仲間。

３年前の悪夢なアトピー悪化の時期に、今の朱石病院と出会い、入院し、色んな仲間ができた。

劇的に悪化してしまった私の皮膚は、そこでとりあえず劇的に修復したのだ。

ていうかっ！！１年ぶりじゃね！？会えるの！去年１回さゆみ達と再会してそれ以来…。

『っしゃぁ！！久々の再会じゃ！！』

さゆみからのメールは、午前２時…て事は４時間前だ。もうこっちにはついてんのかな…。

なんか目が覚めてもた。

5

とりあえずシャワー浴びて出ると、着信が。哲だ。

「チエ！？久しぶり！俺！わかる？」
『わかるって、哲。ちゃんと番号登録したままだよ？』
「わぁ！チエ、元気！？ていうかさ！」
『〈さゆ〉っしょ！？私もさっきメール見たよ！』
「…集まりたい…よな？」
『あったりまえ！？なんで！？ていうか会いに行くでしょ？』
「うん！…よかったぁ」

？？ん？よかった？

『哲？なにそれ？』
「え？」
『よかったぁって何が？？』

哲が疑問系で集まりたいよなって聞いたことも、よかったぁっていったのも、
ひっかかって聞いてみると、哲の答えはなんとも乙女チック（？）

「いや、もう1年も会ってないしさ、入院してたのだって3年前…
連絡もあんまとらねーし、チエとかはもう集まる気とかないかなとか、ちょっと不安で…。」

哲の優しさと純粋さをまた見た気がした…。
それに自分も皆に対して、哲とおんなじように感じてた部分もあったから、

なんか、…ちょっと泣けた。
２２歳、おんとし２３歳、青春感じました！

『何いってんだか！哲らしいけどね。ね、そういや、マサには連絡取ったの？』

哲とマサは男同士だし、退院しても、家も日帰りでいける範囲同士だし、ちょくちょく連絡とってるのは知ってた。
だから、【もちろん！】って返事が返ってくると思ったんだけど…

「いや、最近連絡とれねーんだよ、あいつ。半年くらい。何回かメールも電話も帰ってこないとか続いて、
それから疎遠。だから今日も連絡してないんだ。」

え！？

『そうなの？しらなかった。そりゃ集まるの？って不安にもなるかもね。
私も月に１回さゆとメールするくらいだよ。…なんかさみしいね』

「うん…」

…どうでもいいけど、哲ってこの乙女チックなところが、女心をくすぐったりするんだろうなぁ。
しかし、マサ…。なんか私まで胸がちょっと痛いんだけど。
あんだけ哲とマサって仲良かったのに。

『まぁ、それぞれ皆忙しいもんね。しかたない×２！今回のさゆ入院で絶対くるだろうから、

連絡しろよー！っていってやれ？』

わざと元気に哲を励ました。私も悲しいなぁって思ったなんていえないし。

とりあえず、朝早いってのもあるし、マサにはやっぱり電話通じず。連絡まち。

哲も偶然、今日は休みって事で、一緒にさゆの入院する、私達の出会いの地（？）朱石病院へ行くことに。

マサは…メール待ち。平日だし、仕事かもなぁ。

入院時代１

さゆは入院してたときに私の考えを正してくれた人。
アトピーで苦しんでる私のつらさは私にしかわからないっておもってひねてた私。
アトピーじゃない人にアトピーのつらさはわからない。みんな軽く思ってるんだと思ってた。
彼氏も親も友達にも、私は自分で壁を作って立ててていた。

入院した初日。それを打開してくれたのが、さゆ。

初日、血液検査やら何やらで疲れてたとき、声をかけてきたのがさゆだった。
「こんにちはー。はじめまして！今日からやろ？よろしく！うちはさゆみ」
入院でちょっと滅入り気味な気分のときに、場違いなくらいの元気なさゆの声。

『私はチエ！よろしく！』

そう挨拶を返すとさゆは、にっこり笑った。
気さくなその笑顔がすぐに大好きになった。

そのまま、さゆに誘われるままにプレイルーム行くと、
マサ、哲を含む同い年位の、４人がいた。
マサ、哲、リュージの男３人、あと同室のゆなちゃん。
朱石病院の悪友グループ？との出会いの時だ（笑）

ていうか、彼らは元気！

言ってしまうと身も心もいわゆるボロボロ気分な私で、体調もアトピーのせいで優れなくて、
その中で決定の入院で、静かに入院生活を過ごしていくだろうと思ってた入院初日。
・・・が、さゆが次に言ったのは、
「ラーメン！ラーメン食べいくねん。今日！」
えぇ！？だ…。
「ちえちゃんもいこう！？」
ぇえ！？…

なんて活動的な発言…。否、でもこの入院って食事療法も含まれてて…
・・・え！？・・・てか、入院中…。

とりあえず、まだ検査が残ってたから外出できず断ったけど、
困惑してしまった。なんだ？この子達の元気さ…。
てか、グループの大半が入院するほどのアトピーの症状が出てるとは思えない…。

困惑してる私をみてか、ゆなちゃんが言った。
「5日だよ。入院して5日位で皆、傷とか大分よくなってくってか、気分もね」
続けてリュージ「俺以外はね～。ってうそ。俺、これでも大分よくなった感じなの。」
確かにリュージはまだ回復には時間がかかりそうな感じはする。けど、一番元気っこかも。
「ちえちゃん。」
『ん？』
さゆはあの気さくな笑顔で笑って、言った。
「ちえちゃんもすぐやで？みんな入院初日はな、さゆもやけど、ど

よ〜んとしとった。
ちえちゃんが今どよ〜んとしてるかは、わからんけどさ、
もししてるなら大丈夫！すぐよくなるよったぶん！」
「たぶんかぃっ！」
マサがさゆにそう突っ込んで、なんか笑って、なんか初日から励まされてしまった。

6

『よ！安静にしてる??』

時間は変わって午後。2時間かけて朱石病院へ到着。
哲とも病院の手前で合流。

病室を開けると、なんとも病室がシンナーくさい…
っておい！入院初日から、マニキュア塗りか！?
『馬鹿じゃないの！?笑』
なんとも、型破り的なさゆらしい行動。
哲はその姿に、
「さゆはかわんねぇな！?また先生に怒られんぞ??病室でマニキュアって…。」
と言いながらも、爆笑。

「マニキュアじゃなくってペディキュアですぅ！いいねんいいねん。
なんか、たまたま同室の人おらんくて、うち今個室状態やもん！
てか、早速来てくれてんな??入り入り！！」

相変わらずな、さゆのテンションに笑いながら病室に踏み込もうとしたら…

「こら！！」
…後ろから看護婦さんが。
見慣れたこの看護婦さんは渡辺さん。入院してたとき、よく怒られた看護婦さんだ。
「女の子の病室には…?」
って渡辺さんが聞いてきたから、

『男子立ち入り禁止～～すいませ～ん』
て笑ってごまかした。

「ひさしぶりね？お見舞い？今日は検査が色々あるし、外出ＮＧだけど、
敷地内ならいいから、プレイルームでも行って来ていいわよ？１６時には戻ってね」

っていう渡辺さんの言うとおり、３人でプレイルームへ移動することに。
久々な、さゆや、哲といる感触。楽しいかも。
でも、なんでか、病院は落ち着かない。ちょっと悶々とする。
自分の症状のひどいときを思い出すからかな。楽しいのに悶々。変なの。

7

『ねぇ、さゆ、マサと連絡取れないんだけどなんか知らない？』
「マサ？なに？なんで？知らんけど…なんかあったん？」
『わかんないけど、連絡取れなくて…』

そうだ、退院しても仲間だって話して、離れてても仲間やって話してたのに、
皆疎遠で、きづきゃ、マサとも連絡取れないし、
実際、それにあんまり私は関心がないかもしれない。
昔とは変わってしまったのかな…。

なんでか、私たち3人の中に沈黙が流れた。
それを打開したのがさゆのキンキン声。

「ほな、会いにいこうや！」
「『え！？』」
私と哲は思わず声をそろえて、拒否反応。
いやいやいや、押しかけるのか？？てか、さゆは入院中…。

「じゃぁ、でるまで電話攻撃じゃい！な、チエ、哲！」
…そんな、強引な…。
て、言いながら、3人で病院を出て、3人がかりで電話攻撃開始！
かなり害だな。私たち…。

「……でない。」
『じゃぁ、次私。……でない』
「ほな次うち。……でない。」
「…じゃもっかい、おれ～♪」

3人でやけになってかけまくり、やがて、私がなんかいめかのコールをしたとき
「・・・はい？」
…でた。懐かしいマサの声だ。
『マサ！？やっと出た！』
「てゆうかさ、何回もかけないでくれる？否、もうかけてこないでくれる？」
……プチップープー…
…え？？？

後ろで電話を代われ代われと2人が騒いでる。
…そりゃかなり害な電話のかけ方はしたけど、2こと目に言った（もう）ってどうゆう意味？？
「ちえ？？マサでたんちゃうん？どうしたん？」
『切れた。てか私がキレた。』
「は？なに？ちえ？」
冗談じゃない。なんだ今の切り方は！
もっかいかけなおすと、今度は直ぐに出た。哲とさゆにも聞こえるように、オンフックにした。
「はい！！なんだよ！？」
『もうって何？友達に対して失礼じゃない？』
「お前達みたいに傷の舐め合いしてるようなんじゃ、友達でも仲間でもねぇよ！！」

マサの台詞に3人してあんぐり。
「なんなん？マサあんた何？どうしたん？」
「マサ！哲だけど！なんかあったか？？」

マサはちょっとだんまりになって、
しゃべりだした。

「…俺、皮膚大分よくなったんだよね。
今更ながら、青春取り戻し中っての？
…すげぇ今、楽しいんだ。…ごめん。
哲も、さゆも、ちえも、みんな嫌いとかじゃないよ？
着歴からしてたぶんそこにはいないと思うけど、
リュージとかゆなちゃんとかも、もちろん嫌いじゃないよ？
朱石病院で、色々仲良くなったし、色んなもんもらったよ？
でも、やなんだ。
なしにしたい。今楽しい。アトピーの事は思い出したくない。
お前らと会うと、あの頃の自分思い出すし、いやな思い出じゃないけど、
アトピーの出てた時期のことは今は思い出したくもない。
だからお前らとの友情ごっこもしたくない。かかわりたくない。
ごめん。でもこれが正直な気持ち。ごめん。今幸せなんだ。…」
…プツップープー……

今度はかけ直せなかった。
3人ともかけ直せなかった。
電話越しのマサの声はだんだん震えて泣いているように思えた。

マサの言った言葉が、マサの言った事の気持ちが、わかる気がして、
胸が痛い。
マサの気持ちがわかる気がする自分に対して胸が痛い。

8

『マサはよく言ったと思うよ？マサの気持ちがわからないわけじゃない。』
とぼそっともらした私にさゆがキレた。

「…何て！？…じゃぁ帰れば！？別に無理して会いにきてくれんでええし！」
『私は会いたいから今日も来たもん。
でもマサの、昔を思い出すからってのもわかる気がするって言っただけだよ。』

…そうだ。同じ病気の仲間で、楽しく過ごしたし、いろんな事も話したし、
かけがえない友達だと思ってる。でも、今の生活を謳歌してるから
か、
このメンバーに会うと、胸がなんか鈍く痛いみたいな。昔の傷を自らえぐってるみたいな…。
あぁ、そうか、私はあの地獄な日々に勝ったとか乗り越えたとかじゃなくて、やり過ごしただけなんだ。

ちょっと沈黙が続いた後、さゆがまた口を開いた。
「何、ええ風にゆってるん！？うちらの関係が傷の舐めあいやって思ってんやろ！？どうせ、ちえは！
だからその傷を思い出すって事やろ！？体調がいい時は用なしなんやろ！？うちらは。友達をそういう風にかんがえてんや！ちえは！
…ほんま最低！」

…は！？？もうそんなさゆの言葉に私も逆上。

『ちょ…まってよ。なんで私に怒るわけ？わたしじゃなくてマサにでしょそれは！
なんで最低ってまでいわれるわけ！？マサの気持ちもわかる気するっていっただけなんだけど！？
てか、つらいときに出会った仲間に再開したら、つらい気持ちもフラッシュバックすんのも、普通のことでしょ。普通に。だからなんなの！？
それがマサにはたえらんないんでしょ？多分。ていうか…最低はさゆじゃない？思いやりないよね。』
さゆの目つきがかわってきた。たぶん私も。
「なにそれ？正当化するつもり！？そういうのんを！だまされたわうち！あんたなんか友達ちゃうし！」

…あんたなんか友達ちゃうし！だぁ？？？？…

哲がいいかげんにしろ。と、さゆをなだめる。
でももう、私もひけない。
『てか、私はここにいんだけど？！せっかく会いに来てやったのに、随分なこというわけね…。はぁ…お前なんかもう友達じゃねーよ。』
ぁーもぅ…言葉も汚くなってくる…。もうやだ…。
言うだけ言って立ち去ろうとした私に、哲の言葉。

「なんだよ！ちえはつめてーよ」
『逆に熱いすぎなんじゃない？お二人さん。やってらんない。』

哲もさゆも私も半泣き…。

『もう、私帰るわ…。』

病院をでて、バス停まで歩きながら涙が止まんない…。

最良の友達と思ってたのに。こんな喧嘩したくて来たんじゃないのに。
久々に会えたのに。
いつもはこんなに子供じゃないのに。
なんでこうなんの？
誰が間違ってんの？

9

とぼとぼ歩きながら思う。
なんだっての？それ…。
私が間違ってんの！？
皆でなかよくしたいだけだっての…。
大体マサがなんであんな事、急に…。
♪♪♪チャララ～♪♪♪
ん？着信？健一…か。健一、彼氏である。
『はい？ぁあ、今日？休みやけど、今日はちょっと出かけてる』
簡単にそう話すと、
電話の向こうじゃ、健一が根掘り葉掘り聞いてくる。そして、
「なんで、俺に報告なしなん？」
…。もう…勘弁してよ。
電話口で急いでたからと適当にいい訳言って、謝って…。なんだかどっと疲れる。
健一は「途中まで迎え行く」とごり押しするけど、私にとってはちょっと困る。
会う気分じゃないのだ。
『ホントごめんね。ありがたいんだけど、ちょっと寄るとこあって。』
と、断ると、

「…”ゲーナ”んとこでも行くの！？」
…いかねぇよ・・・
『違うよ？ちょっとしつこいよ？』
「じゃぁさ、なんで俺に黙ってでかけてるわけ！？」
…カッチーン…こいつは保護者か！？
『それはごめんね。また詳しく話すからさ…』
「でも…」

健一の、”でも・なんで・じゃぁ”が続いて、なんとか電話を切る。
私が悪いのかな…。

ちなみにゲーナとは、私の憧れの友達の愛称。
絵本でチェブラーシカとゲーナっていう友達二人がいて、
そこから名前を取って決めたお互いの呼び名。
私はチェブラーシカと名前のチエがかぶってるので、チだけとって
『ちぃ』
相手はそのまま『ゲーナ』

私はゲーナがずっと尊敬する人。というか、ずっと好きなのだ。彼が。
だから、健一は気にするのだ。
私がイライラできる立場じゃないのだろう。

ゲーナとはしばらく会っていない。健一との事を考えた上だ。
それなのに、事あるごとにゲーナを引き合いに出したり、嫌味に使われるのは、気分がいいものじゃない。
でも、怒っていいのかもわからない。

今日は、マサやさゆたちの事で、めいっぱいになってるってのに、
この事で更に、私の頭は悶々…。

…いや、ここはいつもの惰性で切り抜けよっかな。

さゆマサ哲の事。健一の事。ゲーナの事。その他の事。
とりあえず、いつもそうしてるように、惰性の一言でかたずける事にした。

『さて、買い物でも行くかな。』

10

買い物に行って、服を見ててもなんだか気分はのらん。
なんで健一に干渉されなあかんねん。
彼氏やから？か・・・。
最近、会ってないし、今日休みやってことさえもそういや、言ってなかった。
これは、もしやのすれ違い？ってか倦怠期？いやもうでも、付き合って結構たつのに。

買い物にも乗り気になれず、店をでて外を歩いてると、
ガシャンッ！！と激しい物音。
思わず音のほうにいくと、ビルとビルの隙間に微妙に人が集まってる。
物音と男の人の声、でもって、なんともいえない動物の声みたいな悲鳴。
？？なんだ？？

思わず見る目を疑った。
そこには激しく暴力を受けてる若い女の子、でもって、激しく暴力を振るう男の人。
女の子を容赦なく殴る蹴る、突き飛ばす場面に、おもわず、呆然…。
え～と、なんだこりゃ？？

突き飛ばされ倒れた女の子に対し、今度はなんと髪の毛を鷲掴みにして、引っ張って女の子をひきづりまわそうとする…。
髪の毛鷲掴みの姿を見た瞬間に、私は、いち通行人ながら、カッッチーンとなったのがわかった。

きづけば、二人のところに歩いていって、止めに入った私…。
無意識でそこまでして、男の人の腕をつかんだまではいいけど、
無言で腕をつかんだ私に、若干びっくりしたのか、蹴るのを止めて、
私を見返してる…。
あ、私がなんか言うのまってんのか？

えっと…。あ～なんか微妙に私我にかえりましたよ～。

…こういう時ってなんていうんだっけ。
『あ～、えっと、暴力はどうかな…と思うんでっ、止めてあげて下さいな。』
…って、なんか、私、セリフも言い方もかっこ悪くね？

つられてなのか何なのか、その男の人も
「いや、あの大丈夫です。内輪もめなんで～」ってまた女の子の髪を鷲掴み。

私は私で、その髪の毛つかんだ男の人の手をつかみながら、髪の毛から手をはなさせようとしながら
『いやいやいや、待って下さいよ』
っていうのが、私も精一杯。

見れば、若い女の子は、ありえん位にガタガタ震えまくり。
てか、その女の子「止めて」って声がもうおびえすぎて、もはや奇声。
さっきの動物の声と思ったのは間違いなくこの人の声やし。
それに、この男の人、同年代っぽいけど、めっちゃこわいんですけど！

男の人は、逆に私の腕をつかみ、さっきと違うなんともいえない太い声で
「ホンマなんでもないんで」
って、ガン見してくるし…。
いやいやいや、怖い怖いこわいってぇ…。

けど、すぐにっていうかやっと?集まってた人たちも止めに入ってくれて、
とりあえずは一安心…。

んでもって、まもなく、おまわりさんが登場。
誰かが読んでくれたようで、お待たせしましたとか言ってる。
更になんだか、さらっとした感じで、「ん〜喧嘩かな〜?事情おしえて〜。」と暴力振るってた男の人に聞いてる。

私はというと、始めに止めに入ったって事で、おまわりさんに、知り合いかな?って聞かれたけど、
止めに入っただけというと、その場ですんなり、もういいよ〜って帰してくれた。
…は〜〜〜〜〜、怖かった。
微妙にいまだに私振るえてんですけど??

いったいなんだったのか…。
もう今日は厄日やな。と、一人で思い、とりあえず早く帰ることにした。

…でも。今日の厄はまだつづく…。はぁ。
歩いて少しすると、なんだか後ろのほうが騒がしくて振り返る。

えええええええええ!?

さっきの暴力男、こっち方面に走ってんすけど！
しかも、逃げたチックで追いかけられてるし。
怖いってば！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7464a/

惰性

2011年1月12日15時54分発行